防衛庁長官政務官挨拶

ただ今、御紹介に預かりました防衛庁長官政務官の米田建三でございます。このたび、第三回目の安全保障国際シンポジウムが開催されるに当たり、このシンポジウムに参加された皆様に歓迎の言葉を述べる機会を得ましたことを大変嬉しく思っております。

さて、冷戦終結後の国際情勢を概観してみますと、圧倒的な軍事力を背景とする東西間の軍事的対峙の構造は消滅し、世界的な規模の武力紛争が生起する可能性は遠のきましたが、冷戦中に抑え込まれてきた民族上や宗教上の問題などに起因する種々の対立が表面化あるいは尖鋭化し、複雑で多様な地域紛争が発生しています。さらに、大量破壊兵器や弾道ミサイルの移転・拡散が、国際的にも強く懸念されているところでもあります。このように、国際情勢は依然として不透明・不確実な要素を内包していると言えましょう。

アジア・太平洋地域においても例外ではありません。朝鮮半島では昨年、歴史的な南北首脳会談が開催されましたが、百万を超える軍隊が対峙している現実は変わりありません。このほか、台湾海峡、南沙群島などの諸問題が依然として未解決のまま存在しており、この地域には不透明・不確実な要素が依然その存在を保ったまま残されております。

このような地域情勢の下で、より安定した安全保障環境を構築するためには、我が国としての国際平和への寄与、関係諸国との信頼関係の増進などの取組が重要となっております。

かかる観点から、我が国は、二十一世紀に向けての我が国の防衛力の在り方を示した防衛計画の大綱におきまして、より安定した安全保障環境の構築への貢献を防衛力の役割の一つとして位置づけております。これを受けて、防衛庁・自衛隊は、日米間の緊密な協力関係を基盤としつつ、国際社会の安定化に向けて、国連平和維持活動などへの国際協力をはじめ、安全保障対話・防衛交流などを積極的に推進しております。

このような中で、防衛研究所は、諸外国の軍関係の研究機関などとの間で二国間及び多国間のさまざまな防衛研究交流を行っており、安全保障問題に関して研究者の立場から自由で率直な意見交換を実施することにより、各国との相互理解を深めるとと

もに、防衛交流の幅を広げることに一役を担っております。

さて、このたび、防衛研究所が米国、中国、韓国、ロシア及びフィリピンの有識者の参加を得て、安全保障国際シンポジウムを開催いたしますことは、東アジアの平和と安定への一助として、大きな意義のあることだと思います。

本日から明日にかけてのシンポジウムでは、学術的な立場からの報告発表や意見交換が中心になりますが、それだけに研究者同士の忌憚のない意見交換の中で、東アジア地域の安全保障に関する創造的なアイデアが出ればと期待しております。

そして、本シンポジウムを通じ、実りある安全保障論議を進めるための議論の材料が提供され、二十一世紀の東アジア地域の安全保障問題につき私たちの認識が深まり、我が国も含めた世界の安全保障に関する議論がいっそう豊かなものになっていくことを期待してやみません。

最後に、遠路はるばるお見えになられた先生方に御礼を申し上げますとともに、本シンポジウムの成功を心から祈って、私の挨拶とさせていただきます。

平成13年1月24日

防衛庁長官政務官

米田　建三